

「 終わりと始まりを告げる星 」

ミカ書 第5章 2節～4節
マタイによる福音書 第2章 1節～6節

説 教 本庄 侑子 牧師

イエス・キリストがお生まれになったとき、星に導かれて、遠い東の国から占星術の学者たちがやってきました。彼らは、今でいう占い師のような存在ではなく、wise men(賢い人々)といわれる人々でした。

当時、東の国では星の動きが運命を左右すると考えられていました。人々は、自分たちの幸せや世界の平和を願って星を見続けていました。星の動きは重大な学問分野であり、その研究に携わる者には地位や名誉が与えられたことでしょう。しかし、博士たちはそれらを捨てて、「ユダヤ人の王」として生まれた方を拝むため、東の国からはるばる旅をしてきました。

彼らは旅に黄金、乳香、没薬を持参しました。これらは、彼らの商売道具といってもよいものだと思います。それほど大切なものを持参したということは、彼らの人生をかけて旅に出たということでしょう。博士たちは思っていたのではないのでしょうか。私たち人間は本当に星の動きに支配されて生きるしかない存在なのだろうか、と。

神は彼らの人生に特別な星を授けました。当時、救い主の到来を待望したのはユダヤ社会だけでした。遠い東の国にいた博士たちは、聖書の語る神とは無関係で生きてきたはずでした。それにもかかわらず、彼らはユダヤの地にやって来たのです。神が博士たちをいざなったからです。

お生まれになったキリストの前まで来た博士たちは、彼らにとって宝であるはずの黄金、乳香、没薬を手放します。天地万物を創り、私たち一人一人を創り、星をもお創りになった神と出会ったのです。それからの博士たちは、もう星にいざなわれるのではなく、来た道とは異なる道、神のみ声に従う道を通して帰って行きました。博士たちをキリストのもとに導いた星は、神と無関係に生きてきた古い自分に終わりをもち、神と共にある新しい自分の始まりをもち、星でした。

博士たちに起こったことは私たちにも起こることです。18年前のクリスマスに私は洗礼を受けました。それより前の私は、聖書を読んだこともなければ、キリスト者と出会ったこともありませんでした。博士たちのように、勉強に励み、いい学校、いい会社に入り、いい人生を送りたいと思っていました。世界の困っている人たちのために働きたいとも思っていました。

しかし、私は考えました。頑張って勉強した

ところで何になるのか。世界では、私の頑張りなどとは無関係に悲惨なことが起こっている。人の役に立ちたいと願う気持ちをはるかに超えた悲惨が広がっている。そのように考えると、私は生きる意味がわからなくなりました。

そんな時、キリスト者と出会い、礼拝に誘われました。礼拝で語られていた神の愛、「愛がなければ無に等しい」という言葉が私をとらえました。世界の中心が自分から神へと変えられ、それ以来私は礼拝に出席し続けるようになりました。

そして次第に思い始めました。聖書の神は私と無関係ではない。神様は私を知っている。人間を知っている。世界の現実を見抜いている。神様がいらっしゃるといふことは、単なる気休めではなく、本当のことだ。私はキリストの前にひれふし、洗礼を受けました。

一方、救い主誕生の知らせに不安をいただいた人たちがいました。ユダヤの王ヘロデのほか、祭司長や律法学者に代表されるエルサレムの人人です。彼らは自分たちが支配できる世界をもっていて、それを守りたかったのです。彼らは、神の計画を受け入れ、自分の支配を手放すということができませんでした。

預言者ミカは、キリストがお生まれになる場所はベツレヘムであると告げました。神の子であれば、「神の都」エルサレムで生まれるのが当然と考えそうです。しかしそうはならず、かえってエルサレムは、キリストが十字架につけられる場所となりました。しかし、キリストは十字架の死で終わりませんでした。死を打ち破り、復活なさいました。キリストは、力・誇り・栄誉を示すためではなく、人々の罪を引き受けて十字架上で死ぬために、この世に来てくださったのです。

神の力は私たちの期待に反する形であらわれまします。神の愛は私たちの中に流れ込み、キリストへと導きます。私たちの期待はうちくだけ、私たちはキリストの前にひれふします。

博士たちをキリストのもとに導いたのが星であったように、教会に連なる私たちも星として生かされています。私たちの人生は、神の計画によりまったく新しいものにされました。そういう私たちの存在がまだ神様と出会っていない方をキリストのもとに導くことがあるのです。そういう意味で、私たちもあの星なのです。

(記 説教要約奉仕者)